HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	植民地建築の保存活用と観光 ： 韓国の大邱市を事例として
Author(s)	白, 承愛
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第17013号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17013
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100066
Type	doctoral thesis
File Information	BAEK_Seungae_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：白　承愛

学位論文題名

植民地建築の保存活用と観光－韓国の大邱市を事例として

本研究は、解放以後の韓国社会において植民地建築が「負の遺産」として認識され、撤去や放置の対象となってきた歴史的背景を整理するとともに、ニュートロ文化の拡散の中で大邱・北城路の植民地建築が歴史的文脈から切り離されたイメージや体験の対象として消費されている現象に注目する。本論文は観光の文脈において大邱の植民地建築がいかに観光資源化され 、同時に観光資源として消費されていくのかという過程を明らかにすることを目的とした。既存研究が植民地建築を主に「負の遺産」や国家中心の遺産政策の次元から説明してきたのに対し、本研究は地域的実践と空間経験、そして消費過程に注目し、植民地建築の活用と意味形成の過程をミクロな次元から考察しようとした。特にニュートロ文化と MZ 世代の空間消費という文化的文脈の中で、過去の建築が単なる歴史的対象ではなく、現在の経験と感覚を媒介として再解釈される過程を分析対象として設定した。

序章では、研究背景および先行研究を整理し、本研究の問題意識と研究課題を提示した。続いて主要理論を検討し、植民地建築が観光実践と経験の蓄積の中でいかに意味を形成し、再構成されていくのかを分析するための枠組みを設定した。具体的には、集合的記憶、場所／空間、記憶の場、そしてノスタルジアの理論を総合的に用いて、植民地建築を単なる歴史的遺産ではなく、集団的経験と記憶が蓄積される場所として捉える視点を提示した。このような観点から、場所に残存する歴史的要素と観光実践、イメージ消費、経験の相互作用の中で、記憶が再構成され、新たな意義を与えられていく過程を明らかにすることを試みる。特に、本研究ではノスタルジアを過去の単なる想起ではなく、現在の感覚的経験と媒介された集合的感受性として理解し、これに基づき「共感的ノスタルジア」という新たな分析的視座を提示した。

第 1 章では、植民地建築を理解するための前提として、韓国社会において「近代」がいかなる歴史認識のもとで定義され、解釈されてきたのかを検討した。近代は単なる時期区分ではなく、国家形成、産業化、植民地経験、戦争や開発の記憶が重層的に重なり合う概念であり、このような近代認識のあり方は近代建築のもつ意味や定義とも密接に関連している。本研究では、日本と韓国の近代認識および制度的展開を比較、検討することにより、近代が両国においていかなる歴史認識の枠組みの中で構成されてきたのかを明らかにし、その認識の差異が文化遺産の意味づけや解釈のあり方にどのように反映されてきたのかを考察した。そこから、韓国の近代文化遺産政策の導入過程と制度的基準を整理し、近代建築がいかなる歴史的文脈と制度的条件のもとで選択され、位置づけられてきたのかを明らかにすることで、これを北城路の植民地建築を考察するのための概念的・歴史的枠組みとして設定した。

第 2 章では、韓国において文化遺産と観光が政策変化とともにどのように結びついてきたのかを時期別に分析した。2000 年代以降、登録文化財制度の導入と文化観光政策の拡大を契機として、近代建築や産業遺産が文化遺産の範疇に含まれるようになり、文化遺産の活用範囲も保存中心から観光および地域再生との連携へと次第に拡大してきた。これは文化遺産の意味と活用方式が政策環境の変化の中で影響を受けてきたことを示している。

第 3 章では、大邱・北城路を事例として、植民地建築の保存と活用過程を分析した。北城路の植民地建築は、解放以降、撤去されるよりも商業・産業空間として継続的に利用され、地域の日常的空間の中に存続してきた。その後、段階的な改修や用途転換を経て、文化空間、展示空間、観光コースの拠点などとして活用されるようになり、こうした活用の過程の中で観光資源として

の意味が次第に形成されていった。すなわち、植民地建築の意味は制度的指定の有無によって一方的に付与されたものではなく、地域における利用、観光実践、そして経験の蓄積の中で再構成されてきたことを示している。

第4章では、MZ世代とニュートロ文化の拡散という文脈の中で、大邱・北城路の植民地建築がいかに新たな「記憶」として再構築され、消費されているのかを分析した。MZ世代は、過去を実際の歴史経験としてではなく、イメージや雰囲気、視覚的感性を通じて再解釈し、SNSを媒介として共有・拡散することで、植民地建築を写真撮影や体験型の観光資源として意義付けしている。この過程において、植民地建築は歴史的文脈そのものよりも感覚的経験や美的コードの中で受容され、ニュートロ的消費と訪問・共有を通じて、新たな集合的記憶とノスタルジアが生成される空間として位置づけられることが明らかとなった。

終章では、本研究の議論を総合し、日本と韓国において「近代」が異なる歴史認識と制度的文脈の中で規定されてきた点が、植民地建築の意味形成とその位置づけに密接に関わっていることを整理した。また、大邱・北城路の事例を通じて、植民地建築が過去の歴史的意味によって一方的に規定される対象ではなく、現在の文化的活用、イメージ中心の消費、そして空間経験の蓄積の中で持続的に再構成されていることを明らかにした。さらに、ニュートロ文化と結びついたノスタルジア概念を再検討することにより、過去を直接経験していない世代においても、場所の雰囲気や感覚的経験を媒介として過去志向的感受性が形成されることを示し、序章で提示した「共感的ノスタルジア」という概念が、こうした現象を説明する分析的視座として機能していることを示した。